

あとから来る者のために
坂村 真良

あとから来る者のために
田畑を耕し
種を用意しておくのだ
山を
川を
海を
きれいにしておくのだ
ああ
あとから来る者のために
苦勞をし
我慢をし
みなそれぞれの力を傾けるのだ
あとからあとから続いてくる
あの可愛い者たちのために
みなそれぞれ自分ができる
なにかをしてゆくののだ

EMによる国づくり

謹んで新年のご挨拶を申し上げます。

認定 NPO 法人地球環境共生ネットワーク
理事長 比嘉 照夫

二年続きの新型コロナウイルスパンデミックによって、組織や社会の仕組みの大変革を実行する年となりました。社会全体としては、SDGs(持続可能な社会運営)の重要性がより深く認識されるようになりました。この活動に不可欠な基本は、安全で快適、低コストで高品質、善循環的持続可能を、自己責任と社会貢献認識で推進し続けてきた EM 活動以外の選択肢はありません。

EM による国づくりで最も重要なことは、これまで繰り返し述べたように、「病気になる生き方」の徹底と自力でできる災害対策の社会化を強化する必要があります。すなわち、国の施策とは関係なく、自力で生活化することが肝要です。その本質的なことは、拙著「日本の真髓」(文芸アカデミー刊)に詳しく書いてあります。

昨年 U-net 通信等で紹介した、野本ちずこ著「微生物さんのパワーを引き出すのはあなた」(パブフル刊)を参考に、EM 技術を繰り返し実行し、EM の持つ重力子効果を引き出し、EM のプロとして通用するメンバーも増え始め、着々と EM の社会化が進んでいます。

U-net の活動も、更に効率よく発展的にするために、zoom 等を活用した情報交換や、ユニバーサルビレッジのモデル作りを中心に、臨機応変に対応したいと考えています。そのため、U-net 事務局を、より機能的にする必要から、沖縄へ移す予定で、これまで以上の技術指導と情報発信が可能となります。

① 会員に対するEM技術のスキルアップ

日進月歩のEM技術情報の発信をより充実したものにします。また、EMウェルネスクラブの機能を更に強化し、会員各々の EM 力の向上を革新的に進め、各々が地域の環境や健康を守る指導士的な役割を担えるように仕組みを強化します。「愛と微生物のすべて」及び「日本の真髓」には、無限の情報が込められています。答えはすべてその中にありますので、繰り返しお読みください。

② 広域の水圏環境改善対策

児島湖や三河湾や東京湾をはじめ、EM による水圏の改善対策は着々と進んでいます。水系における EM の結界技術の確立によって、広域の水圏の環境改善対策も低コストで容易に実行することが可能となりました。

茨城県下妻市の砂沼や三重県の白石湖等々、驚嘆すべき明確な成果がでています。すなわち、結界強化法によって、大規模な水圏に対し、より効率的な浄化法を実施できるようになりました。

③ EM技術による福島復興支援

福島の放射能対策の復興支援は、第9回環境フォーラム「うつくしま EM パラダイス 2019」で明らかのように、放射能汚染対策は完了し、その次のプロジェクトとして、真に環境や健康を守り、経済的にも豊かになる世界モデルとしての善循環的自然農法にチャレンジしています。福島県内には着々と優良事例が根付くようになりました。

④ 福祉施設や学校におけるEM活用の強化

EM 技術の進化によって、福祉施設や学校における活用が多様化できるようになってきました。その基本は、良質の活性液や整流炭の応用等々ですが、より安全で快適、低コスト、高品質で持続可能を日常化することです。

今年も会員皆さま方の EM 力が更に向上することを期待しています。

EM讃詞

EMさんごめんなさい
EMさんありがとう
EMさんお願いします
重力波、善循環、蘇生(3回繰り返す)
EMさんありがとう
EMさん大好きです
EMさん愛しています



令和4年第1回EMセミナー・比嘉理事長講演会

1月14日に令和4年第1回のEMセミナー・比嘉理事長講演会がオンラインで開催されました。EMセミナーとして「世界のEM普及状況」の演題でEM研究機構の小島慶太氏に発表して頂きました。次に比嘉理事長には「量子力学に基づくEMによる国づくり」の演題でご講演して頂きました。

小島 慶太 氏

「世界のEM普及状況」



株式会社EM研究機構(EMRO)は沖縄を拠点として、EM技術を世界中に発信している会社です。EMを製造している国は50か国以上、使用している国は100か国以上になります。今回は各国の事例を、農業、水産、社会貢献、環境の分野に分けて紹介したいと思います。最後には弊社が現在取り組んでいるSDGsと関連したブランドについても紹介したいと思います。

農業分野

EMを活用した農場では、栽培する作物が高品質で高収量になるだけでなく、病害虫が減り、農薬や殺虫剤など栽培コストを減らすことができます。ブラジルの大規模農場では、大豆栽培にEMを活用することで線虫被害が減り、収量が上がりました。また、イランのように、肥料過多による塩害が出る土壌でも、EMを活用する事で、養分を植物が吸収しやすくなり、作物の収量が増えるという事例はたくさんあります。

EMは無農薬や無化学肥料で野菜を栽培するのに、とても効果的な資材です。世界の有機農業の現場でも多く使われています。エクアドルでは、移住した日本人のバナナ農家の2代目である田邊氏が、自身の農園で出荷できなかったバナナをEMボカシやミミズ堆肥として再利用し、化学肥料や殺虫剤を使わない美味しく安全なバナナを栽培して日本に輸出しています。また、フランススコ氏は、コーヒーで有名なハワイ島のコナ地区で、EMを活用したオーガニックコーヒーを栽培しています。コーヒーのパッケージには「ハワイ生まれ EM育ち」と書かれています。さらに、スイスで長年、EMを活用しているベルンハルト・ハニ氏は7.5ヘクタールの農場で約140種類の野菜を育てていますが、2021年のセレス賞「オーガニックファーマー」という賞を受賞しました。これは欧州(ドイツ、オーストリア、スイス)の中でNo.1の有機農家に選ばれたという事です。個人だけではなく、インド北東部のシッキム州では州の政策として有機農業に取り組みました。

2015年より政策として州全体を有機農業化するために、EM資材を無償で提供し、EM有機堆肥の作り方を農家へ指導するなど、約14万人がEMの活用方法を学び、約5,700ヘクタールの農地でEMが活用されました。シッキム州では州内全ての農地が有機認証を取得し、この州全体で有機農業を推進するとした政策は2018年に国連から最優秀政策賞を受賞しました。



【線虫被害から回復した大豆畑:右 EM 使用前 左 EM 使用後】



【たわわに実ったミカン】



【バナナ農園】



【ベルンハルト・ハニ氏】



【オーガニックコーヒー】

次世代の農業の担い手を育成するのにも EM は役立っています。タイのサラブリー県には約 30 年前、政府によって開発された土地がありました。そこはやせていて農業に不向きな場所でした。しかし、現在その土地は、EM を活用した農業について学べる研修センターとして、自然農法を教える場となっています。これまでの 30 年間で 25 万人の研修生を受け入れ、EM をアジア全域に広げるだけでなく、自然農法のリーダーを養成する場所として重要な役割を担っています。また、コスタリカにあるアース大学は、農業専科大学で中南米の若手人材育成を目的に設立されました。大学では EM を勉強できるコースもあり、学生は学んだことを自国に持ち帰り農業の担い手となっています。



【自然農法研修センターで学ぶ研修生たち】

水産分野

エクアドルは中南米で最大の養殖エビ生産地ですが、2019 年にホワイトスポットという病気が蔓延し、エビの収量が半分になるほど被害を受けました。病気の蔓延を防止するために、池に定期的に EM を投入し始めると水質が安定し、エビも健康な状態を維持し、半減した収量を、なんと 1 年で元に戻すことができました。現在では、池に EM を投入するだけでなく、無菌状態が主流の孵卵場でも EM が使われており、生まれたばかりの小さなエビのエサにも EM を混ぜています。



【EM で育つエビ】

社会貢献

2021 年に西ドイツ、ベルギー、オランダで大規模な洪水がおきました。被害を受けた町では洪水後、ドイツのパートナー会社である EMIKO 社より 15,000 リットルの EM が提供され、悪臭などの衛生対策に役立ちました。

また、南アフリカのケニアでは、町の野菜市場などに散乱したゴミから発生する悪臭や、ハエ、蚊によって環境汚染、健康被害が問題となっていました。



【ドイツ: 配布される EM】



【ケニア: 回収されるゴミ】

弊社の現地法人 EM Technologies 社は、そうしたゴミを EM で堆肥にし、使える資源として農地に戻し、収穫された作物を、エイズにより親を失った子たちの孤児院に寄付するだけでなく、孤児院でも農業が出来る様に指導する活動をしています。さらに、ポーランドでは「地球トイレ」活動が実施され、多くの人が集まる場所に設置されているトイレに EM を活用して悪臭対策をする活動が行われています。

環境分野

人口の増加や生活様式の変化により、生活排水や工業活動による河川の汚染が問題となっています。ベリーズでは砂糖の生産時に発生する廃水が問題となっていました。EM で廃水処理する事で河川の汚染だけでなく悪臭や、害虫、廃水処理にかかるコストや労働力をも減らすことに成功しました。

また、アラブ首長国連邦にある人口の湖では、水の循環機能がない影響で藻が発生し景観を損ねていましたが、EM を使って水質を改善しました。特に EM 団子は河川の水質を改善する事から、世界各国で EM 団子を環境浄化のために河川に投入するプロジェクトやイベントが毎年行われています。

【EM 団子投入イベント】



これまでの報告では、ハワイ島のアラワイ運河やオランダのキュラソー島、ポーランド、コスタリカ、沖縄でも同様のイベントが行われています。マレーシアでは、街づくりの基礎から EM を取り入れたプロジェクトが行われました。マレーシアのタナステラ社と共同で EM を建築に使うプロジェクトです。EM を添加したコンクリートを使って、街には 1,230 棟の分譲マンションと併設された商業施設や学校が建築されました。街の商業施設、ステラモール内では、“EM&ME”というイベントが 1 か月間開催され、イベント内では環境学習や EM 団子づくりも行われました。

H&LOOP ブランド

これまでの活動に SDGsの考えも組み合わせ、さらに EM のファンを広げようと、弊社では新たに H&LOOP(ハンドループ)というブランドを立ち上げました。

弊社では、タイのペチャブリー県で、エビを養殖し日本に輸出しています。養殖場では、EM を活用した水質改善、エビの健康管理もそうですが、使用する水を 100%リサイクルし、環境に負荷をかけない養殖がなされています。

このように、EM を活用した良質な製品を生み出すとともに、生産する人も、製品を使う人も、それを取り巻く、環境もすべて健康にする生産ラインを作る事と、皆様に安全で安心できる製品を提供していきたいと思い、研究開発を進めています。

現在は、コーヒーを製品として提供していますが、今後、カカオや弊社の自社農園で栽培している野菜や、バナナといった製品も準備していますのでご期待ください。



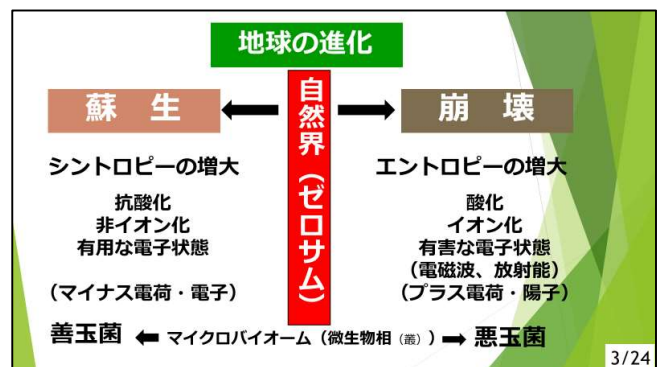
比嘉照夫理事長

「量子力学に基づくEMによる国づくり」



新型コロナウイルスの世界的大流行は、経済や社会の仕組みに大きな影響を及ぼし、様々な変革を余儀なくしています。このような状況下、困難な課題に対応してきたことで、EM 技術は飛躍的な進化をとげてきました。また、2015 年に国連で採択された SDGs(持続可能な開発目標)の実現には、「地球を救う大変革」を社会的公約と掲げている EM 技術を活用するしかないと確信しています。この機会に、量子力学に基づく EM の機能や人類の抱える問題に対する対策について学んでもらえればと思います。

地球の進化は、自然界では常に、あるものが生まれて活動し、最後は滅ぶという様に大循環しています。しかし、長い期間で見ると、生命を発生する蘇生の方向に引っ張っていく力と、これを壊していく力が働いています。蘇生の方向は、量子の世界が中心となります。量子状態は重力波からのエネルギーをもらって成立しており、このエネルギーが作用する全ての場が素粒子的となり、この状態は熱力学の法則に反することになります。蘇生の方向に



促す特性のあるEMは、抗酸化、非イオン化、有用な電子状態(有用なエネルギーに整流化)、量子力学的重ね効果と原子転換といった機能を有しています。そして、これらの機能を有することから、農業、畜産、水産養殖、養蜂、林業、廃棄物処理、汚水・排水処理、バイオレメディエーション、放射能対策、クリーニング、建築、省エネ、環境保全、健康などあらゆる分野に活用されています。

一方、SDGsを実現しようとする、人類が抱える自滅のシナリオである次の5つの項目を解決しなければなりません。一見して、これらの問題の解決はほぼ不可能と思われませんが、EM技術を徹底的に活用することにより、それぞれの問題を解決することが可能となります。

1)人口増大による森林破壊、旧来の農法(化学肥料や農薬)による土壌汚染や砂漠化による食料不足について

人類自滅のシナリオ

1. 人口増大による森林破壊、旧来の農法(化学肥料や農薬)による土壌汚染や砂漠化による食料不足。
2. 温暖化による気象変動(自然災害の多発)。
3. 資源の枯渇。
4. 未知のウイルスや難病の増大。
5. 人間の理(損得、勝ち負け)による文明の自己矛盾(必ず亡ぶ構造になっている)。

2/24

現在の汚染放出型の生産体制やライフスタイルを続け、環境汚染を産み続ける限り、従来の技術では解決が不可能であり滅亡的です。それを解決するためには、全ての有機物汚染を資源化し、生産を通して環境を浄化する技術を確認する必要があります。その一例が、炭化技術による世界の農地のテラ・プラタ・ノバ化(奇跡の土壌テラ・プラタの再現化)です。テラ・プラタとは、アマゾンで発見された太古の土壌改良法であり、炭の機能を活用した半永久的な作物生産システムのことです。この技術を農業に取り入れると、CO₂は作物生産や土壌に固定され、現今のCO₂問題は解決すると言われてはいますが、再現が困難とされています。しかしながら、EMを応用したEMグラビトン炭やEM結界技術によって、低コストで、簡単に実現できることが明らかとなっています。タイのサラブリ農場や沖縄のサンシャインファームにおいては、テラ・プラタ・ノバの完成の域に到達しつつあります。したがって、農地の効率的な活用を進めれば、今の農地の半分で100億の人口を支えることも容易となり、さらに、余分な農地は森林に戻すことも可能となります。

2)温暖化による気象変動について

森林の微生物の活動で放出されるCO₂は、現今の全てのCO₂排出量の10倍以上もあることから、地球温暖化の主犯はCO₂ではなく、また、CO₂の制御は無意味であると考えられます。私は温暖化の原因は、核実験によってこれまで放出された放射性物質や、原子力発電や使用済み核燃料等の放射性物質による熱汚染と、マイクロ波による過熱と電気を過剰に使用してきた結果として発生した多量の陽イオン(プラス電子、相手の電子を奪い破壊する性質がある)が原因だと推察しています。すなわち、電気を使用すると、その役割を終えたマイナス電子は主として大地に戻り、水分の蒸発を助長します。プラス電子(陽イオン)は空間に集積し電磁波を発生し、地球を加熱します。同時にイオンの片寄りを安定化するため、空間に存在する水分子を集め、巨大な水量を貯め込んだ雲になります。その結果、集中的な降水帯を形成するが、まわりの水分が失われた地域は、雨が降らず砂漠化します。その極端な例が、昨年12月に米国の中西部や南部を襲った「史上最大級」と称された竜巻です。したがって、石炭火力を止め、太陽電池や風力発電など自然エネルギーを使用しても、状況を改善することは不可能です。EMはあらゆる電磁波を有用化し、生物生産や環境浄化を強化する機能を持っていることから、環境をすべてEM化し、量子技術によって有害化した電子を資源化できる仕組みを作り解決せねばなりません。

3)資源に枯渇について

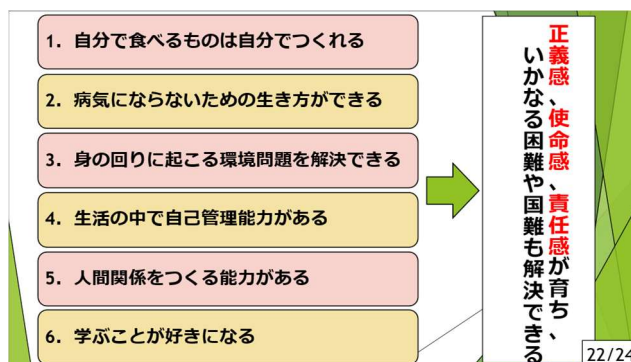
EMIによる整流技術や量子技術を活用することにより、機材や建築物の超々高寿命化と、汚染を出さない高機能リサイクル化が可能となります。例で言うと、1000年住宅、100年自動車などですが、無限の量子エネルギーを活用することにより循環的にすることができます。この技術はあと少しで実用化できるレベルにきています。

4) 未知のウイルスや難病について

人体の細胞の90%は微生物でできており、EM生活に徹することで善玉菌を優占にし、日和見感染を防ぐことで、ミトコンドリアの機能が正常化するため、病気にならない生き方ができます。難病の大半はミトコンドリアの異常によるものであることから、酵素の力や量子的治療で解決が可能となります。また、新型コロナウイルス対策の基本は、本来の自然免疫力を免疫ビタミン(LPS:リポポリサッカライド)で強化することです。LPSを効率的に産生するパントエア菌はEMと共生的に増えることから、EM農産物にはLPSが多く含まれています。また、腸内細菌をEM化すれば腸内でもパントエア菌が活動し、LPSを産生することから、EMによる果物の皮の発酵ピューレやインスタントヨーグルトで十分な対応が可能となります。

5) 人間の理による文明の崩壊(EM技術の新しいチャレンジ)

EMは、SDGsが機能する仕組みを本質的に支える力を有しており、EMを活用したユニバーサルビレッジづくりを促進することにより、自然と調和した幸福度の高い社会を創出します。そして、病気にならない生き方の教育を徹底することにより、現今の医療費の浪費的パターンが生産的パターンに変わり、医学に投入された無駄な人材を国家の人材として活用することが可能となります。今やインターネット、AIの時代であり、クリエイティブ(創造)がより重要となっています。その基本は自然を身体で理解し、芸術的に処する生き方が大切であり、農業や自然にたずさわる技を教養とすべきです。教養とは、すなわち、望ましい人生を創造する力です。個人のレベルでいえば、図の6つの能力を獲得することにより、正義感、使命感、責任感が育ち、いかなる困難や国難も解決できる人材となります。



この人材育成とユニバーサルビレッジづくりは、文明崩壊を防ぐための幸福度の高い社会づくりの両輪です。現在、U-netの活動として、ユニバーサルビレッジモデル事業に取り組み始めています。そして、この活動を世界規模で展開するため、今年の11月に沖縄にてユニバーサルビレッジ国際会議を開催することを検討しています。また、世界各地のEMプロジェクト会議を強化し、国家および国連のプログラムに乗せるようにします。これまで説明してきたように、量子の世界は、想念次第で祈りもパワー化し得ますが、この力に結界技術を応用すれば、量子エネルギーを良い方向に活用できるようになります。このような技術で日本や世界にユニバーサルビレッジ作りを展開し、「地球を救う大変革」を完成します。

★令和4年第1回EMセミナー・比嘉理事長講演会ダイジェスト版 動画視聴のご案内(会員限定)

1月14日の比嘉理事長、小島氏の講演の様子をまとめたダイジェスト版の動画を配信期間中であれば、インターネットに繋がるパソコン、スマホで、お好きな時間に視聴できます。

【配信期間】 2月18日(金)の朝9時～翌日2月21日(月)の夜9時まで

視聴をご希望される会員の方は**2月14日(月)**までにお名前を明記の上、「第1回ダイジェスト版視聴希望」と記載して事務局へメール(info@unet.or.jp)にてご連絡をください。

視聴用URLは2月17日(木)に事務局よりメールにてお知らせいたします。

国内の EM ニュースの紹介

■比嘉照夫教授講演会が福島県で開催されました。

昨年11月12日に福島県伊達市で NPO 法人りょうぜん里山がっこう主催の比嘉照夫教授講演会がオンラインで開催されました。講演の概要をご紹介します。

1. 高野金助 氏 (NPO 法人りょうぜん里山がっこう代表理事)

「NPO 法人りょうぜん里山がっこうと大石3ちゃん倶楽部の活動紹介」

りょうぜん里山がっこうは、「だれでも先生、だれもが生徒」という理念を掲げ、世代を越えてみんなが元気に支えあう活動の拠点づくりのため、平成 12 年に廃校になった中学校校舎を活用し創立されました。平成 19 年には NPO 法人格を取得し、現在は様々な事業活動をおこなっています。そのひとつが大石 3 ちゃん倶楽部で、福島県伊達市霊山町大石地区の 60～80 歳代の“じいちゃん”、“ばあちゃん”、“かあちゃん”の 3 ちゃんを中心となり、自分の畑で野菜を少量多品目栽培し、量販店の産直コーナーやマルシェ等にて販売する活動を行っています。3 ちゃん倶楽部では持続可能な地域をつなぐため、自ら2割(20%)若返り元気で楽しむことを目標にしています。

この活動は 2014 年から始まり、現在では福島市内の量販店 6 店舗へ、各栽培者から集荷した野菜の配送を行っています。畑づくりには EM 活性液や EM ボカシなどが活用され、安全でおいしい野菜作りのために土づくりに力をいれています。また、各農家さんには活性液の配布をしたり、定期的にぼかし作りの講習会なども行っています。活動の成果は着実に現れており、昨年度は野菜の販売で 2,000 万円の売上を達成する事ができました。今後も土づくり(EM ボカシ肥)を日常化し、EM 活性液散布で美味しい野菜を増産しながら、持続可能な環境をつくり、健康で元気な人生をみんなで紡いでいき、また生産と販売を強め、自立した仕組みも作っていきたいと思っています。

2. 石井孝幸 氏 (石井農園代表)

「持続可能な農業と人づくりのためにできること」

私は大学卒業後、建築関係の仕事に従事していましたが、元来より地球や人体を蝕む環境汚染に危機感を感じていました。1993 年に比嘉照夫博士の著書「地球を救う大変革」と出会い、この技術なら世界を変えられるかもしれないと、EM について勉強を始めました。関東 EM 普及協会の基礎講習やエコアドバイザー講習会の受講、農家見学、そして、自宅ではプランター等で野菜栽培をしながら技術と知識の蓄積に努めました。その後、建築関係の仕事を辞めて大規模減農薬栽培を実施する農業法人に就職し、農業に関する基礎的な知識を習得したのち、2001 年に父親の故郷の須賀川に移り、EM を活用した自然農法を開始しました。

マクタアメニティ(株)の EM 堆肥やボカシ肥料を活用し土づくりを行いながら地元の名産品「岩瀬きゅうり」を栽培しはじめ、地元の大手のスーパーマーケットで販売して味が評判になったことで、2008 年にはマクタアメニティ(株)を通して、高級スーパーマーケットチェーン紀ノ国屋に EM オーガ・ブランドとして卸すことができていました。

しかし、その矢先 2011 年に東日本大震災・福島第一原発事故が発生し、販売などがすべてストップしてしまい、放射能汚染の風評から取引が無くなり売上は激減しました。そうした中でも、ベラルーシでの研究報告でもわかるように、EM 施用により農作物の放射能の吸収が抑制されるという確信がありましたので、EM を使い続ける事によって毎年の放射能検査ではキュウリからの放射性セシウムはずっと不検出となっています。また、キュウリでは難しいとされる無農薬栽培を実現し、且つ、味も美味しいと評価を得たことから需要が高まり、現在は売上も回復しつつあります。

実際に行っている EM を活用した無農薬キュウリの栽培方法をご紹介します。

キュウリの苗づくり

- ① 播種箱にもみ殻くん炭を 5cm 高さに敷く。
- ② 播種箱全体を EM 活性液 30 倍希釈液に浸す。
- ③ もみ殻くん炭の上に土を 1cm かけ、左右 2cm、上下 8cm の間隔で、予め EM 活性液に浸しておいたキュウリの種子を埋める。
- ④ キュウリが発芽し本葉が 1cm くらいの大きさになったらカボチャの台木に接木する。
- ⑤ 散水時には、EM 活性液 100 倍希釈液を施用する。

キュウリの定植

- ① 接木したキュウリの本葉が 3 枚半になったら、苗を EM 活性液 30 倍希釈液に浸漬し畑に定植する。
- ② 定植穴には EM 活性液 30 倍希釈液をあらかじめ注入しておく。最近ではハウスの整流結界なども行い、露地、ハウス両方を使って周年的にキュウリを栽培する事が出来ています。

小学校の総合学習に関わるようになり、EM の小冊子「小さな生き物たちの大きな力」を活用し子供たちに EM 基礎講習を教えるとともに、EM 活性液や EM ボカシの作成、野菜作りや環境活動を実施しています。この活動を通じて、子供たちは環境を守ることや食・農の大切さを学ぶとともに、「自然の摂理」や「命の大切さと生きる力」を学んでいます。

また、様々な作業は、子供たちの責任感や創意工夫する意識を高め、さらに仲間と協力することの大切さを学ぶ良い機会となっています。こうした活動を今後も続けながら、地球環境を守り自然と共生が可能な農業を実践し、EM を活用した食農教育と環境浄化実践活動を通して、子供たちの生きる力を育てていきたいと思っています。

3. 比嘉照夫博士（琉球大学名誉教授） 特別講義「有機農業立県福島を目指して」

比嘉教授からは、初めに福島県での EM 導入の背景についてお話がありました。

1990 年、松平知事の要請で、福島県市民会館にて「新世紀の農業」と題して EM を活用した自然農法の講演会が開催され、約 500 人の参加がありました。農業講演会としては前例のないほど盛況となり、EMI に関する全県的な活動がスタートしました。また、1994 年には、須賀川市のアリーナで 3000 人余りを集めた EM 活動の大集会が成功し、EM が福島全県に知れわたり広がるようになりました。EM 発酵堆肥を活用した幕田アメニティグループや、EM 自然農法を実践する農家が増大しました。その後、104 の県商工会女性部が EM を生ごみリサイクルや、環境浄化活動に活用するようになり、全国一の EM 活用県になりました。

毎年のように福島にて善循環の輪の集いなど EM の講演会が行われていましたが、2011 年の東日本大震災と原発事故によりそうした活動が一時中断しました。しかし、EM による放射能対策が明確となり、認定 NPO 地球環境共生ネットワークの復興支援活動の一環として福島県の EM を活用した活動は続けられるようになっていきます。そのような背景から、福島有機農業立県は、必要必然的な歴史的役割を持っています。

次に、SDGs と EM について、EM の機能性に関するお話、そして、EM グラビトン炭を活用した整流結界について、沖縄のサンシャインファームやタイのサラブリ農場での活用事例を挙げてお話を頂きました。

コロナの関係で福島では 2 年間研修会が開催されていなかったこともあり、久しぶりに開催された研修会に会場は盛り上がりました。整流結界や塩を活用した EM の最新の農法について活発な質疑応答や意見交換がされました。



(写真:会場の様子)

■EM で花と野菜づくりの集い 特別講演会が宮城県で開催されました。

昨年 12 月 6 日に宮城県栗原市にて、U-net 理事の平野勝洋氏が代表を務める「EM で花と野菜づくりの集い」主催の特別講演会が開催されました。平野理事の開会挨拶の後、相馬勝義氏(栗原市議会議員)、千葉健司氏(前栗原市長)、そして長谷川敦氏(元県会議員)がご挨拶されました。次に、以下のご講演がありました

1. 菅原萬一 氏(岩手コンポスト株式会社 代表取締役専務) 「岩手コンポスト農業用肥料活用による米作り」

岩手コンポストでは EM を活用した有機質肥料(コスモグリーン)を製造しており、このコスモグリーンと EM を活用しお米を生産しています。また、450 項目の残留農薬の検査で全て不検出となったそのお米は、EM 栽培米「残留農薬0の米」(商標登録第 5919701 号)として販売をしています。講演では、その栽培方法について発表がありました。



2. 奥本秀一 氏(株式会社 EM 研究機構) 「EM を活用した土づくりと福島有機農業立県への取組み」

EM を活用した基本的な土づくりについて紹介するとともに、奥本氏が海外において実施した土づくりによる病害虫対策の事例や、有機農業の発展における EM 技術の貢献について発表しました。また、現在、福島で進めている福島有機農業推進プロジェクトでの取組みについての紹介がありました。

講演会の参加者は農業(稲作、野菜、果樹)や養鶏業を営んでいる方達が多かったことから、EM 活用に関心が高く、活発な質疑応答が交わされました。



写真 講演会の様子



写真 EM 栽培の稲株を紹介する菅原専務

事務局からのお知らせ

令和4年第1回理事会開催について

令和4年度第1回理事会を下記の通りWeb会議(ZOOM ウェビナー)で開催いたします。
日時:令和4年(2022年)3月4日(金) 13時00分~13時40分
理事の皆様には2月中旬までに理事会案内書を郵送致します。

第23回通常総会開催について

第23回通常総会を下記の通りWeb会議(ZOOM ウェビナー)で開催いたします。
日時:令和4年(2022年)3月4日(金) 14時00分~15時00分
正会員の皆様には2月中旬までに総会案内書を郵送致します。

書籍の販売について

比嘉理事長が必読書として講演会等でご紹介されている書籍「愛と微生物のすべて」と「日本の真髓」を会員の方に送料無料で販売します。まだ、お持ちでない方はこの機会にご購入ください。

すでにお持ちの方は、ご友人、知人への贈り物、紹介用にご活用ください。
お得な会員価格は以下の通りです。

- ・『愛と微生物のすべて』 ヒカルランド発行 会員価格 1,800円(消費税込み)
- ・『日本の真髓』 文芸アカデミー発行 会員価格 1,500円(消費税込み)

なお、事務局の在庫がなくなり次第、販売は終了いたしますのでご了承下さい。
購入ご希望の方は、メール又はファックスにてU-net事務局までご連絡ください。

【連絡先】 E-mail:info@unet.or.jp Fax:03-6450-1195

★令和4年度ユニバーサルビレッジモデルづくりプロジェクト提案書 募集について(U-net 会員対象)

U-net では昨年から重点事業の 1 つとしてユニバーサルビレッジ(※1)のモデルづくり事業を日本各地で開始しました。昨年は 1 年目の取り組みということもあり、U-net の理事を対象に「ユニバーサルビレッジモデルづくりプロジェクト提案書」を応募しました。その結果、以下の 5 つのプロジェクトが助成対象に選ばれました。

- 1) 「農村・都市ぐるぐるエコの会」 実施地:北海道 担当者:石川理事
- 2) 「水琴窟の巨匠とコラボした癒しと美味しさと楽しさと、すべての命を支える高波動オーガニックガーデン」 実施地:愛媛県、野本理事
- 3) 「水産加工廃棄物を活用した持続可能な“循環型地域農業”のモデルづくり」 実施地:宮城県、担当者:平野理事
- 4) 「自然循環型次世代フリースクール」 実施地:島根県、担当者:小川理事・野本理事
- 5) 「取手市全世帯の生ごみ堆肥化に向けてのモデルづくり」 実施地:茨城県、担当者:東市理事

これらのプロジェクトの目標や計画、進捗状況は、昨年開催された比嘉理事長講演会の中で各担当者に方々に報告して頂きました。(U-net 通信令和 3 年 10 月号 Vol.117 及び 3 年 12 月号 Vol.118 参照)

令和4年度は、ユニバーサルビレッジのモデルづくりをさらに推進するために、U-net 会員全員を対象に「ユニバーサルビレッジモデルづくりプロジェクト提案書」を募集することになりました。

EM を活用した核となる活動を行われていて、拠点、コミュニティをすでに持っている会員の方で、それらをさらに推進、強化することにより、社会的な効果を生む自立的なユニバーサルビレッジに成長させたいと考えておられる会員の方は、ご応募ください。

U-net 執行委員会での審査の結果、助成対象に選ばれたプロジェクトには助成金(最大50万円/年)を暫定 3 年間支援すると共に、ご要望に応じて技術サポートを行います。

本募集への応募にご関心がある方は、U-net 事務局にご連絡ください。本募集内容と応募条件についてご説明します。応募される会員の方には、事務局より「ユニバーサルビレッジモデルづくりプロジェクト提案書」の応募用紙をデジタルデータで送らせて頂きますので、必要事項を記入の上、**3月31日(木)**にまでに事務局にご送付ください。

※1 ユニバーサルビレッジ(Universal Village)とは

マサチューセッツ工科大学(MIT)の正木一郎教授が提唱された「地球環境及び生物多様性の保全および人類の持続可能な発展を可能とする社会、コミュニティ」を表すもので、科学者、事業者、政治家、市民の共通認識とするために創られた名称です。

EM を活用したユニバーサルビレッジとは、あらゆる場面で EM を空気や水のごとく使う EM 生活を徹底し、安全、快適、低コスト、高品質、時間と共に成熟する高度情報共存共栄社会、すなわち、真の意味で自然と調和した幸福度の高い社会づくり、国づくりの基礎となる大小様々なコミュニティを表します。

シンプルに表現すると EM 的価値観が共有され、EM の活用が徹底的に実践されているコミュニティです。